

西鶴その他雑考

前田 金五郎

一、西鶴の人間観

本題目を考察する前に、筆者が考究資料として、以前精読した先行西鶴研究書から、納得の行く箇所を引用して見よう（以下人名には、筆者の恩師以外は、すべて敬称を省略した。敬語は使用を誤ると、却て不敬となる恐れがあるからである）。

先ず筆者が昭和十九年七月東京文理科大学に提出した卒業論文執筆中に、多大な影響を受けた片岡良一『井原西鶴』（大正十五年三月、至文堂刊行。本書が同氏の東大卒業論文とは驚嘆の一語のみ）本文中から参考になる箇所を抜書すれば左の如くである。

「之（芭蕉ヲ指ス）に反して西鶴の強さは同じく俗を離れながらも、其逆に俗其物を眺めさせた。所謂無着意の心を懐いて然も現実を肯定する者の世界が其処に生れた。眼をそむけて心耳をすますもの

と、心を据えて諦視するものとの相違——との相違から出発して反対の方向に徹して行つたが故に、芭蕉は山野に吟懐をよせる主情的な詩人となり、西鶴は浮世の巷に没頭する主知的な小説家となつたのである。単なる芸術家といふ以上に一箇の道人であつた芭蕉の生活は、素より西鶴には望めない崇高なものであるけれども、西鶴のやうな傾向な人が、さうした生活に入つて行かれなかつたのも、亦一面止むを得ぬ性格的必然であつたと思ふ（二三頁）。（原文の漢字は可能な限り当用漢字に、読点の下は一字分空けて引用した。以下同様）。

「如何にも元禄といふ時代の子らしい西鶴の激しい、情熱的な性格の一面を、判然と観取し得べきですがあると思ふ。……けれども、かうした場合に於ける彼を見るに、其処に少しも、感情の過剰がない。感情が感情を生んであるといふやうな形が少しもない。かの平賀

源内が満腔の不平や不満を爆発させた時の文章などを読んで時々感じ
 されられるやうな、密度の存外稀薄な、遊離した感情の踊りが、西鶴
 の文章からは殆ど感じられない。風来の激しさは、激しいながらにこ
 くがない。甲高い声の響がうつろである。之に反して西鶴には何処ま
 でも底力で押して行く趣きがある。云はゞ風来の激しさは多く所謂悲
 憤慷慨の空疎さに墮してゐるのであり、西鶴のは何処までも性格の燃
 焼としての根強さを保つてゐるのである。だから風来には西鶴の程の
 重さと凄味とが無い。彼はたゞ頹廢時代の一奇矯児に過ぎなかつたの
 である。が西鶴は元禄といふ力の時代の人間であつた。当時の新興階
 級の一員として強く激しい時代精神を最も濃厚に体现した男であつ
 た。だから彼には線香火火的な所がなかつた。何んなに激しても、常
 に足下が危ふくならなかつた。彼の感情は如何に常規を逸して奔騰し
 ても、常に或る力強い裏付を失はなかつた。其処に彼れ自身の性格の
 強さが端的に反映されて居る」(三三・三頁)。

「只彼(西鶴)は性格的に人生の觀照家であつた。踊る代りに眺め
 る側の人であつた。さういふ素質とその素質を生かすに足る強い性格
 と鋭い目を以て、彼は出来るだけ細かく深く世相に觸れて行つた。
 さうして掴み得た現実其物の相を端的にその作品に再現したのであつ
 た。彼の俳諧が人事趣味によつて貫かれた所以である。と同時に、同
 じ理由の故に彼の人事趣味句には説明がなかつた。抽象的な思惟の影
 が無かつた。すべてが現実から掬ひ上げられて来たまゝの具体的を有
 つてゐた。」(一〇一頁)。

「彼はかういふ印象的な筆触を以て、人事世相に絡る悲喜哀歡のさ
 まゞを自由自在に詠みこなした。その自由な活動のうちに、彼に最
 も缺けてゐたと云はれる詩人的な稟質さへ、或る程度迄は發揮された
 のであつた。」(一〇三頁)

「忍ぶ恋の情趣も親孝行の苦衷も、彼を夢見る心地や感傷に誘ふこ
 とは出来なかつた。感傷や陶酔に蕩かされることのなかつた彼の強い
 性格と鋭い眼とは、如何に激情的な事件や情景にぶつかつても、決し
 て狼狽や昂奮に陥ることがなかつた。常に穏やかに澄んだ眼光を以
 て、さういふ事件や情景の隅から隅まで眺めさせた。昂奮や熱情的行
 動をも傍觀し得る人のみが見出し得る可笑し味が、これらの句に溢れ
 てゐるのではないか」(一一三頁)。

「人生を果敢ないまゝに肯定して其処に安住する気持、その気持が
 更に一步を進めた時、果敢なさど頼りなさとのうちに、一種の味ひと
 面白味とを感じようとする。……如何に根深く人生虚無の思想が、彼
 を動かしても、夫によつて人生百般の事象を圧離する気持には彼はな
 れなかつた。……彼も亦(師)宗因と共に「夢の浮世ならそれを夢の
 浮世として暮すのも面白いではないか」と觀じたのである。……彼は
 人生無常の想念其物にさへ執着しなかつた。その想念を乗越へて、そ
 の想念の彼岸に展開される現実世相其物を、靜かに味ひ楽しんでゐる
 のである。六十年の生涯を閲して、遂に愚かな我と悟りながら、所詮
 はその愚さ以外に我無きを觀じて、我が愚さを慈しんだあの一茶の心
 持を、対現実の想念の裡に示したものが、即ち西鶴であつたのであ

る。所詮は果敢ない人生でも、その人生以外に住むべき所を有たない人間であることを知つた西鶴は、其の果敢なさの裡に起伏する色とりどりの出来事を娯しまつたのである」(一一九～一二〇頁)。

「西鶴に其点の明確な意識があつたか否かは別として、浮世草子を今日から見て一口に云へば、世相を描き人間生活の諸体容を録して、そこに読物としての興味への力点を打つこと、多少の小説的結構を設けることを忘れなかつた一種の文芸作品であつた。従つて夫は日常の事件を録した今日の所謂小説と一脈通ずるものであり、他面一種の新聞記事に類したものであつた。」(一五四・五頁)。

「生れながらにして人生の観照家であつた西鶴は、その病的に迄強かつた性格の故に、人生に徹した。あらゆる感傷の曇りから救はれて、所謂人生の寂寥所に味到した。と同時にその鋭い觀察力の故に、世相のあらゆる隅々と人間心理の複雑な陰翳とを、心行く迄味ひ尽した。自ら彼の作品には思想といふよりももつと深く、哲学といふには余りに具体的な、人生の味ひ其物が味はゞされた。其の味ひの深みに比べれば、彼の教養の如き素より云ふにも足りないものであつた。理性の彼はその味ひの深さを規定するには余りに貧弱な力しか有たなかつた。必然的に、さうした深い味ひに迄味到した彼自身の氣持を、彼は自ら浅く評價した。……彼の作品に接して深い感激を觸発とを感じさせられるのは、云ふ迄もなくさうして彼が正面から世俗と人生とに對つて呼びかけた言葉の底に、微かに隱約し揺曳する感懐の深さと思念の複雑さとのためであつた。」(四〇六・七頁)

「彼の文章の特徴として挙げらるべきものに具体主義と正確主義とがある。前にも云つた通り常に物と形に即して文をやつた西鶴は、抽象的におぼめかして物を云ふのを肯じなかつた。廻りくどい説明を嫌つた彼は、対象を具体的に感じさせようとして、しばしば譬喩に走つた。其処にも彼の抽象を嫌つた氣持が感じられると共に、其の譬喩其物が又直ちに感覺を卑近に刺激する世界に於てのみ選まれてゐたことも注意されねばなるまい。……さうした具体的な譬喩が、一層彼の文章を澆刺たる生命觀を以て彩つたのは争れない。と同時にさうした具体主義と直接に連なる性質として、彼の文章に数字の使用の多いことも注意されねばならない。……抽象的文字の曖昧さを嫌つた彼は、かうしてその徹底した正確主義をその文章の上に示したことになる。又更にさうした技巧——卑近な譬喩や数字の使用などのうちにも、それが感じられる可笑味の濃厚さも、亦西鶴文の特質の一つと考へられる。意義の低い單なる滑稽から、素晴らしい才氣を思はせる機智、更に深い人生を裏打とした所に生ずる所謂ユウモアと、可笑味のあらゆる段階を尽して、然もそれらが一つに絡み合つて、西鶴文にある特殊な情趣とゆとりを与へている。西鶴の文章を云ふ場合には、それも素より軽く見過ごされていゝものではなかつた。殊にそれらの可笑味が、その俳諧に於ける場合と同様に、單なる悪ふざけ乃至は強ひられた諧謔にほんの時々陥つた他は、常に自然の味ひを湛へてゐるとも、注意されねばならないことであらう。」(四二八・九頁)。

「西鶴八）たゞあるがまゝに觀じた人生の相に、素直に従はうと

いふのである。一切が偶然でも必然であると同時に必然である不可測な天の支配の俛に動くものであると観じたが故に、一切を放下してその天の支配に随順しようとするのである。そこには無論無限の哀愁があつた。人間の絶対的無力を痛感して、その無力其物に安住しようとするものゝ哀愁があつた。と同時に、離れきつたもの、自己を天の運行に任せきつたものゝ、安易さにも似た暢びやかな気持があつた。西鶴は徹底的人生観照家としての生涯といふ道程を経て、終にかうした悲しい暢びやかさに安住し得たのである。」(四三三・三頁)。

次に野田壽雄『日本近世小説史 井原西鶴篇』(平成二年、勉誠社刊)から、筆者が尤もと感じた箇所を抜粋して見よう。

「さきに西鶴の小説は、『人間の裏』を書いたと述べた。『人間の裏』とは、人間の正面には出ない隠された面ということで、言ってみれば私的な面ということである。好色、利己的な欲望、金銭欲などは、人間という地表に隠されたマグマみたいなもので、表面には現れなくても、人間の裏側には絶えず鳴動し続けているものである。社会面でも同じような事が言える。たとえば、敵討といったものでも、表面では体面や正義に見えるけれども、本音は怨念晴らしという隠された動機が存在しているであろう。やはり社会の裏である。また奇談というものもそうである。普通有り得ない事が有り得るのは、社会の表面に出ないで隠されている出来事が、突如現れてくるから奇談なので、これも社会の裏側のはなしと言つことができよう。あるいは、底辺の貧民生活というものでも、表向きの社会には隠されているが、そ

の裏に実存していることは確かで、これも社会の裏面と言つていいであろう。

西鶴は、右のような好色・利己欲・金銭欲・敵討・奇談・貧民生活といったものをテーマに、小説を書き続けた。すなわち、彼は常に、人間の裏、社会の裏を取り上げて書いているのである。人間の裏あるいは社会の裏を取り上げるのは、そもそも文学や芸術の特性かも知れない。文学や芸術は、人間の感情生活や感性を主眼とするが、それだけに人間や社会の裏面に眼を注ぐのである。普段何気なしに過している裏側の世界、そこに案外人間や社会の真実があるものである。たとえば、好色と言つただれでもいやな顔をする。けしからんと思う。だが、好色は人間の奥底の真実ではないだろうか。」(八六〇・一頁)。

「明らかに西鶴は、写実ということに執念を燃やしている。たとえば『好色一代男』の出雲崎や酒田の風俗、『諸艶大鑑』の遊里の内情、『日本永代蔵』の大坂・江戸・堺などの風景などは、前人未踏の筆を費やしている。そればかりでなく、容姿・衣装・金勘定・料理・土地の名物などの細密描写は、一体何という事であろうか。あくまでも写生に徹したと言つても言い過ぎではない。しかし、だからと言って、写実主義のみが彼の本領であつたとは言ひ切れまい。

西鶴の別な特徴を挙げれば、人物の滑稽化ということがある。『好色一代男』の世の介の早熟ぶりなどは、真面目に書いているのかも知れないが、誇張があつて可笑しい。『世間胸算用』の老婆の愚痴なども、本人は真剣かも知れないが、始末過ぎて滑稽である。こうした人

物の滑稽化は、人間を悲劇的に書くのではなくて、客観的見方からする喜劇的な描写に由るものである。この人物の客観視は、もちろん彼の俳諧修行から来るものであつて、わざとそうしたのではなく、斜に構える俳諧そのものの見方と言つてもいいのであろう。俳諧は字義の通り滑稽、または俗なのである。彼の俳諧的手法は、人物の滑稽化ばかりでなく、文体や構想にも及んでいる（八六四・五頁）

以上両書から筆者の感心した箇所を引用してみたが、両書とも、西鶴作浮世草子作品中の箇々各章中に見える人物については、批判がましい表現をしているが、全作品を通して、人間一般については、左の数例の引用が見られるに過ぎない。

「公家の装束なしには、かうやく売の貞の白ひもの也。一切の人間其職にうつせばうつる物ぞかし」（『諸艶大鑑』三の三。貞享元年刊）。

「黒衣を着すれば出家、烏帽子しらはり着れば神主、長剣させば侍と成。世に人ほど化物はなし。」（『好色盛衰記』一の三。貞享五年刊）。

「それ人間の一心、万人ともに替れる事なし。長剣させば武士、烏帽子をかづけば神主、黒衣を着すれば出家、鎌を握れば、手斧つかひて職人、十露盤をきて商人をあらはせり。其家業、面々一大事をするべし。」（『武家義理物語』序。貞享五年刊）。

右の三例は、近世身分社会では、各身分の相違は有つても、その身分の差別を無視して、個々の人間そのものを比べれば、その一心即ち

本質は、「万人ともに替れる事なし」と断言しているのであるが、その「一心」とは何かが問題なのである。

一方、『諸艶大鑑』五の三には、

「けふあつては明日は。露の消るに間のあり。稲妻石火。たばこ呑間も。女良の命程はかなき物はなし。それじやとて。先は見へぬ世の中。一日増りになじめば、人程かはひらしき物はなし」。

と見える「人程かはひらしき物はなし」と言う人間観とは、どう云う関係があるのであろうか。これについて、以下筆者は粗雑ながらも私説を述べて見よう。

筆者が東京高等師範学校三年生の英語の授業に福原麟太郎先生から、ジェイムズ・ヒルトン作『チップス先生さようなら』（原名『Good-bye, Mr. Chips』）を教材に一年間教えられたが、同先生は十九世紀前半のエッセイスト、チャールズ・ラム『エリア随筆集』を愛好され、『チャールズ・ラム伝』（平成十二年、沖積舎刊）を著作出版されたが、その第四章『エリア随筆集』中に、同随筆集中の一篇「萬愚節」（April foolの和訳名）について、左のように解説されている。

「人間の弱小感を押しつめてゆくと、弱小なるところに人間同士の同情が湧く。英雄や天才は、人間社会に共通でないものを持つてゐる特殊な存在である。特殊な存在を通しては、服従礼拝以外に万人を結びつける絆は無い。あらゆる人が同じ立場に立つて、お互の条件の等しさを感じ合ふことが出来るのは、お互に弱小であるといふ点を認め

合ふ時である。これは、結局、人はみな動物であるといふやうな思想に窮極することも出来る。人はみな死ぬものであるといふ、諸行無常の思想に到達してしまふこともできる。そのやうな無常観をつしるにして、人はみな馬鹿であるといふ見方が成立する。それは悲しむべきではなくて、だから、人間はお互にいとしいものであるといふことになるのが、ラムの「萬愚節」の主旨である。

これは四月の雑誌に載せたから、四月一日萬愚節を当て込んだものであつた。」

このエッセイは、歴史的な大愚人を始めとしての愚人列伝で、作中人物の名なども、際限なく挙げられるが、その後に突如として、

「真正正銘なところ、貴郎に真実を白状すれば、僕は、馬鹿が好きなのです。生来まるで同族の如く好きなのです。」

と名台詞が飛出すのである。

この名文句に触発されたのか、福原先生のエッセイに「愚人を愛する心」(昭和四七年、新潮社刊『幸福について』所収)と題する一文が左の如く書かれている。

「ものごとを異つた角度から見直すこと、別なことばで言えば、違つた価値観によつて物事を考え直すこと、さういう才能ないし才覚をイギリス人たちはヒウマーと呼んでいる。いわゆる英国的ユーモアで、英国的な人生の知恵の特色をなしている。ヒウマーもしくはユーモアが可笑味といふ意味であることは間違いないのだが、大しておかしくなくて、ふと、違つた見方をして目前のものの価値を見直して

心を新たにする知性ないし感性があれば、その人はヒウマーを解する人である。(私は一般におかしさをいうときユーモアといい、イギリスのおかしさをヒウマーと呼ぶことにしている)。……チャールズ・ラムは、砂の上に城を築こうとしたものや、灯油の補給などいうことに全く気付かず、ただ、キリストに会いたい一心で出かけて、途中で灯が消えたという五人の娘や、旅にゆく親父さんからタレント金を預けられて、手の平に握つたままで一文も増やすことをしなかつたという、のんびりした息子たちこそ愛すべき人間である。彼らをこそ友とすべきだ。『実は私は馬鹿が好きなのです』(「I love a fool」の和訳)と言っている。さういう見方、つまり人間を愚の極点まで引き下ろして、もう一べん考え直してみればよいのである。人間はみんな馬鹿なのだ。愚人を愛するということは、人間を愛するということになる。さういう転換から生れるおかしさ、それがヒウマーである。さういう風に思い直せば、何にてもあれ、人間のこと、おかしくまたかなしくないものはない。泣き笑いのおかしさがヒウマーというものの特色である。」

とパラフレーズされている。

また、添野章夫著『福原麟太郎論 叢智の文学』(平成十一年、光陽社出版刊)の第一章「チャールズ・ラム われ愚人を愛す」には、イギリス文学は、「面白いのか、面白くないのか」という根本的な問いを福原は発する。この問いは重要である。福原の結論は、イギリス文学は叢智の文学と見ることによって面白くなるということである。

福原は「叢智の文学」について次のように説明する。即ち「福原は、一番典型的な叢智の文学として随筆（エッセイ）をあげる。その言によれば、「随筆の特質は、英国民の生活の哲学の口語的表現にある。彼らは何くれとなく書き連ねるうちに、おのれの人生観を述べる。随筆は知識を書き残すことでなく、意見を吐露することでなく、叢智を人情の乳に溶かしてしたらせる事である。争うためではなく、仲よくするためである。」そして、「随筆ということになれば、英文学における代表的な随筆家、チャールズ・ラム（一七五五～一八三四）が当然登場するわけである」と前置して、福原ラム論を論述するが、その特質として、以下の三点を挙げている。即ち「第一に挙げなければならぬのは、『愚人を愛する』という視点である。……人間というものは愚かなものだ、また弱いものだという認識がある。愚かだから、弱いから、互いに愛し、思いやるということが出来るのだというのである。」

「福原がラムの中に発見した第二の点は、随筆を成立させるものとしての気質である。ラムは人間の気質のなかに随筆の無限の宝庫を発見した。ラムの関心をもったテーマは人間はそれぞれ気質が違うということなのである。……人間の性質は十人十色であることは明らかである。ラムはこの人間の気質に無限の面白さを発見し、随筆のテーマにした。」

「第三として挙げなければならないのは、真実を見据え、隠さず表現する勇氣である。それを福原は『殻を破る』という言葉で表している

る。」「ラムというと、全体としての感じは穏やかな人間というイメージであろう。たしかに弱者にたいするいたわりがある。秋霜烈日とは無縁であることも真実である。しかし、ぬるま湯にひたっているには名エッセイはできない。人がよいだけではすぐれた作品は出来ない。福原はそこを問題とするのである。そして、ぬるま湯的態度や、お人好しの『殻を破る』ことが真のエッセイ誕生の要素であるとすると、そして結論として、「福原の『ラム伝』を読むと、見事にラムを自分のものとしていいることが分かる。福原は、自分の文学の師としてラムを読んでいる。言葉を換えれば、福原のラム理解は、ラムと共感し、一体となることなのである。」と述べている。

以上の三解説で、チャールズ・ラム『エリア随筆』の中の、人間観を知り得たが、このラムと西鶴との人間観の異同如何と云う問題を次に考えて見よう。言う迄も無く、ラムと西鶴とは、その一生を送った時代も社会も違うから、時間・空間・因果関係・現実性・個性・性その他の諸概念等々が全く異なるのは言及する迄もないから、両者の比較などは、ナンセンスと一笑されそうではあるが、それでも敢て一考して見ようと思う。と言うのは、この作業が西鶴研究の些少ながらも一助ともなることから筆者は考えるからである。

先ず、「馬鹿」の語義は、「対象の言行を、常軌を逸して愚かしいとして侮るさまであること。また、そのような言行をする人をののしつていう語。」（『時代別国語大辞典 室町時代編 四』。「バカ（馬鹿・馬嫁・破家） 物事をよく知らなかったり、躰が悪く、礼儀をわきま

えなかつたりするために、人がしてかすであらめ。」(『邦訳日葡辞書』)「ばか」馬鹿」①愚かなこと。また、その者「用例省略」②(接頭語的に用いて)度はずれての意をあらわす(用例省略)。(『岩波古語辞典』)等の解説で、近世前期の語意は十分と思われるが、西鶴作品の諸用例にも此の語義を適用して差支え無いようである。

所で、西鶴作浮世草子全作品を通観すると、人生マラソンで成功した人数に対して、それに失敗した人々、一・二例を挙げれば、大商人(又はその二代目)が、色遊びに現を抜かして身上を潰し、文字通り「破家」になってしまった人や、欲に目が眩んで、ハイリスク商法に手を出し、見事失敗して、すっからかんになったとか、馬鹿者列伝めいた話がかかり多く、人間は本来馬鹿なのではあるまいかとの感を禁じ得ないが、それらの登場人物に、西鶴は罵倒ないしは侮蔑的言辞を発していないようである。換言すれば、人生いろいろ人さまざまで、世の中には多くの失敗者が実在するが、西鶴はそれらの人生を冷静に描写して、批判がましい言葉を余り使用していないのである。(ただし、『石車』など俳諧論戦書は除外)。従って、西鶴は人間のなかには馬鹿が多いことを事実として認識していて、それも人間の持っている本性の一部とし、一時的にその本性を發揮する者と、長くその種の言行を続けて「破家」に至る者と、一生その本性を表わさぬ所謂賢い人どが実存するのが、この世の中だと感じていたのでは無かろうか。ラムのように、馬鹿な人間の方が好きだとは断言せぬまでも、その種の人間はかなり多く存在するのだから、それを所謂「馬鹿にしな

いで」、人並みに応待するのが、まともな世渡りでは無いかと言つのが、「人程かはひらしき物はなし」との西鶴の発言では無いかと推量される。その晩年の作『西鶴置土産』の登場人物についての評論で、通説に反して、水田潤『西鶴置土産』と散文精神」(同著『西鶴論序説』所収。拙著『近世文学雑誌』所収『西鶴研究書読後感一括』に引用)に、「ここには、没落の自嘲感も敗北感もなく、世捨人的感覚や脱俗の思念もない。ここにあるのは、『零落』やその極限の不調和に象徴される生への確信と楽天性であり、それを見つめる作家の散文精神である」と論述したのに全く賛成である。なお、西鶴は笑いの談林俳諧師であるから、その浮世草子本文は、笑いのペールを透して対象を描写するので、とかく喜劇的筆致になり易く、悲惨な事象を行文しても、その中に笑いのタッチが間々見られるのが特質である。尤もそのペールは、サロメの七枚のペールでは無いが、初期ほどペールは厚く、後になるほど薄くなるのは、通読すれば明らかである。

以上で筆者の稚拙なラム・西鶴の比較文学的考察は終るが、最後に、西鶴全浮世草子の各巻各章の登場人物について、一々この物差で計測する必要があるが、この点については、今年九月十一日に満八十八歳を迎える筆者には、そんなエネルギーは無いので、その研究は新進気鋭の後続西鶴研究者に期待して、この粗雑な一研究(?)の筆を措く。

「追記」本論文成稿後、ホルスト・ガイヤー著『馬鹿について 人間—この愚かなるもの』(池田久敏・泰井俊三共訳 創元社 昭和三十

三年初版発行。同四四年刊一〇版に依った）を一読した。「訳者あとがき」によれば、一九〇七年ドイツのエナ生まれの人類遺伝学者で、精神医学的立場に立つた三十数篇を著している由である。「このように精神医学者である著者は、人類遺伝学を経とし、剛毅不屈なドイツ魂を緯として、ギリシャ・ローマの昔から宇宙征服の未来に至るまで、永遠に変らざる人間の愚行のあらゆる様相を描破し、人間性の愚かさに皮肉な、しかし温い微笑を投げかけている。結局人間は人間な限り愚かであることもまぬがれないが、それ故にこそ彼は救われる、というのが本書の結論である。」こうして本書は人間の自己嫌悪、自己暴露の書ともいべきものであり、よき意味の国粹主義的な立言は、実にドイツ的だナ―と時にわれわれに微笑を洩らさしめるのであるが、一時我国を風靡したアメリカ流の環境万能主義、安易な楽天主義に対する頂門の一針として、多くの参考とするに足る事実と主張を本書は提供していると思われる」との訳者の解説を要約すれば、嘗て、日本でテレビ放送が開始された時、大宅壮一が、これで「一億総白痴化」（全日本人が馬鹿になる、の意）だと喝破した前例に倣えば、本書は「人類総馬鹿」説を唱えたのである。これに比べれば、ラム・西鶴両者は、それ程徹底せず、人間の馬鹿加減を穩かに考察し、ラムは馬鹿が好きですと発言し、西鶴は馬鹿な言動を冷静に観察描写し、好きとは言わないが、これも人間の一つの生き方と侮蔑・罵倒的表現はしなかったと推察される。なお『馬鹿について』にも引用されているエラスムス『愚神礼賛』、セバスチャン・ブランド『阿呆船』

などの古典的名著を参照すれば、西鶴の人間観も比較考察に依って、より明確になると思われるが、それは後日の課題として、本稿は『馬鹿について』を紹介するだけにして置く。

二、「あかあかと」の芭蕉発句の解釈

芭蕉『奥の細道』の金沢への「途中吟」と題しての一句「あかくと日八難もあきの風」について、私説を記述しようと云うのが本稿の目的である。なお同書注釈文献は汗牛充棟の形容も極めて不十分と思われるほど、多数発行されているので、私説と同様な解釈が既に先行書に発表されていたら、その著者に対して前以て御詫び申上げて置く。

本句が、『古今集』巻四・秋上の巻頭歌「秋立つ日よめる 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる 藤敏行朝臣」を典拠とする説が大方支持され、筆者も同意する。次に「あかくと」の「あか」とは、「明明と」、「赤赤と」の両意が当時並行使用されていたが、筆者は「明明」の意を採用する。この語意についての詳考は筆者が「俳諧用語考」（拙著『西鶴語彙新考』平成五年、勉強社刊所収）に解説したので同稿を参照されたい。次に、この和歌と発句とを比較対照して考察すれば、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども」との抽象的表現に対して、「あかくと日はつれなくも」は、明るく輝き、暑さを感じさせる午後の日光が、旅人の芭蕉に

残暑のきびしさを思い知らせるがと具体的に明々白々と表現している。即ちパラフレーズすれば、秋は来ぬどころか、まだ秋は来ぬと言わんばかりの午後の日光の暑さに閉口している芭蕉の心情なのである。

また「つれなくも」の「も」には、「逆接の接続助詞」と「詠嘆の助詞」の両説があるが、原歌の「見えねども」の「ども」が「確定逆接条件」の接続助詞（松村明編『古典語現代語助詞動詞詳説』参照）で、この両語が対応する位置にあることを考慮すると、「も」は「逆接」の意とすべきであろう。また「赤赤と」の意に取れば、夕日の時分には昼間に比べて多少涼しくなり、「日はつれなく」の感じは薄れるであろうから、「明明と」と午後の白日の意とすべきであろう。なお「風の音にぞおどろかれぬる」と、いささか持って回った表現に対して、「秋の風」と、ずばりと五音の季語で結んで余韻を残したのは、和歌と俳諧発句との表現の相違を強く感じさせる作句である。要するに本発句は敏行朝臣の名歌を換骨奪胎して、見事な発句に創作したものと言えよう。

所で、本句についての諸説について、阿部喜三男『詳考奥の細道』を参照すれば、肝心の語意その他の吟味が不十分で、注釈者自身の感想やらその他を述べたものが多く、句意が正確に説かれない傾向が多分に見られるようである。例えば後出書であるが、堀切実編『おくのほそ道』『解釈事典―諸説一覧』（平成十五年、東京堂出版刊）には、「あか〜と」には両説ありと記すだけで、そのどちらが正説かを記

さず、「日」には「夕日」、「暑さがりの日」との両説があり、大半は「夕日」を支持し、後者は「あまり支持されていない。」と、やはりその正否を記さない。また、尿前の関の条の発句「蚤虱馬の尿する枕もと」の「尿」の訓みについて、従来「バリ」「シト」二説があり、「近年『シト』説優位の状況にあったが、中尾本（芭蕉真筆と称される写本）に『バリ』のルビが確認された。したがって今後は、『バリ』の読みが確定することになると思われるが」と記してあるが、『バリ』説については、既に拙稿「俳諧用語考」（『連歌俳諧研究』二〇号）昭和三五年一〇月刊。後に拙著『西鶴語彙新考』所収）に於いて、『日葡辞書』・諸節用集・諸用例を引用して詳説して置いたから、この拙稿を参照すれば中尾本の振仮名で確定したなどと脳天気な解説は施さないであろう。要するに本書の執筆者は調査不足の上に、真偽を判断する能力不足と言わざるを得ない。もっと年期を入れて真剣に研究し、読者の信頼可能な解釈事典を制作すべきであろう。

三. 佐古慶三先生の研究一斑

佐古慶三先生が大阪郷土史に関する精密な考究による、偉大な研究成果を達成されたことは、今更言う迄もなく、その成果の一端としての著書『古板大坂地図集成』（昭和四五年、清文堂刊）の大坂地図五種複製と、その解説「古板大坂地図集成に就いて」とは、筆者も一部購入して多大な恩恵をいただいているが、その前触とも言うべき、

『古板大坂地図聚成』とその解説が、大正十五年に刊行され、昭和十一年六月十日―同七月十日間、大阪城天守閣で開催された大坂地図展の『古板大坂地図展観目録』には、佐古先生所蔵七十図が出品され、筆者の手許には、「古板大坂地図の年代鑑定―附り明暦板の三種についての卑見」（『大坂古書月報』）なる玉稿抜刷二部が現存しているが、これも先生から頂戴したのである。この論考の一部を抜書すれば冒頭に、

「古板大坂地図の年代を決めるには、刊記のあるものはそれに従えばよいが、刊記のないものには

1 城代・定番・町奉行の任免年月を調べ、その共通するところを。

2 河川の開鑿なり橋の架設をもって。

例えば河川なら、

貞享元（年ヲ省略。以下同様。―引用者注）九条島を切り

開き新川（元禄十一安治川と名付ける）をば掘る。

元禄十一 堀江川の開鑿

元禄十二 難波島を切開して難波島は月正島と分離する。

橋では、

貞享 新中橋（道頓堀川）架設（元禄末、相合橋と改

称）。

元禄初 堀江橋（堂島川）架設（元禄末・玉江橋と改

称）。

同 中之島比丘尼橋を除く。

元禄八 桜橋架設

元禄十一 堀江橋（堀江川）架設。

元禄十六 亀井橋架設。

3 新地の開発なり町名の設定または町ぐるみの移転をもって。

例えば新地の開発なら、

元禄元 堂島新地・安治川新地。

元禄十二 堀江新地・幸町新地・富島新地・古川新地。

宝永五 曾根崎新地。

町では、

元禄元 湊橋町。

元禄七 西高津町。

元禄十六 元伏見坂町・玉造より道頓堀南裏に移る。

元禄末 堂島に新茶屋町できる。

宝永元 片原町に南側できて相生町と改める。

4 著名な工作物の建設なり廃止をもって。

貞享元 波除山を築く。

正徳二 難波御堂・南渡辺町に伸びる。

享保九 津村御堂・本町まで拡がる。

5 前記の各項目を総合して判断するか。

すれば、凡そその目当は容易につけられる筈である。」

と前置きして、この調査法による『大坂図鑑目』各板の序列を決定

し、林吉永板『新撰増補大坂大絵図』の各種板の刊行前後の吟味等に明断を下されている。

次に「大阪昔日の地割を論ず」(『建築と社会』七月号)は、近世大阪の「路幅を引くるめて京間四五間正々方々の特殊地割こそ、難波京に於ける條坊の遺制であると」佐古先生の確信を実例を、種々挙げての玉稿である。

更に『史学趣味』二巻四号(昭和十二年四月刊)所載の「大坂図の見方(一)」は、近松の世話浄瑠璃に見える地名の考証論文なので、以下同文を引用して見よう。

「古地図を見ればその当時の地理が判かるといふ世俗的な考へから、わが大坂の地図を年代順に十二・三枚よせ蒐め沿革図の代りに使つてみたところ、所期の効果を収めるには余りにも古地図それ自体が不完全なることを悟るに至つた。例を近松の世話浄瑠璃に籍つて説くならば、

(一) はや天王寺に六時堂七千剩巻の経堂に、曾根崎心中元禄十六(以下右例の白丸は省略して引用。——引用者注)

藤井(乙男)博士近松全集頭注(太子堂の北隅にあり、二十一番、七千余巻は一切経をさす。

近松語彙(地名部)撰陽群談に「四天王寺のうち太子堂の北の隅にあり、大坂巡礼第二十一番」と見えてゐる。

元禄板の林、大絵新撰増補大坂大絵図の省略では西門を入つたところの経堂に、大坂卅三所観音札所の合紋が附けてある。こ

の堂は撰陽群談元禄十四に

輪蔵 玉智光院に相向へり、十六善信を安置す。一切蔵経を四百八十函に納め、其函車輪の如くして諸人結縁のため廻之。因つて輪蔵と号く。

とあるが、芦分船延宝三「きやう堂」、四天王寺伽藍記元禄三「経蔵中略しやか一代の経此だうに有り」とあつて、近松の七千余巻といふ枕詞もこの経堂ならこそ生きて来る。しかし太子堂内の経堂では法華経一巻しか納めてゐないから、仮令その本尊が如意観音巡りの札所としては正しくとも、近松のこの文を解くには妥当でない。化政頃の摺物「大坂三十三所観音めぐりのづ」を見ても、廿一「きやうどう」をば廿四「万どういん」と列らべ、廿二「こんどう」廿三「こうどう」の西手、即ち輪蔵の所在に書出してゐる。これは順路の便宜上さうすることが慣はしになつてゐて、一般に行はれてゐたと考へてよい証拠になりますまいか。

(二) 戎橋や戎橋越えて、見たや見せたや難波橋なんばし 卯月紅葉宝永三 藤井博士、難波橋難波入堀に架す。

萬屋 図鑑綱目撰津大坂図鑑綱目大成の省略では大黒橋に改称されてゐるけれど、おなじ宝永板の新版撰津大坂東西南北町嶋之拙書「解図七には未だ「なんばはし」となつてゐる。撰陽群談に、

大黒橋(道頓堀川筋)南北ともに惣右衛門町と久左衛門町の涉り、難波村の通路、世難波橋と云ふ

とあり、宝曆大坂町鑑にも大黒橋の異名として難波橋を載せてゐ

る。

(三) 花の吹雪の桜橋、梅田の縁、曾根崎の青葉隠れの鳥の音も、法花長屋の名をたて、神祇釈教恋無情、中にこめたる中町やその家々の吉野川、流れの数の多ければ妓が情けの

心中刃は水の朔日宝永六

参考

藤井博士、今の堂島裏二丁目を永来町といひ、船大工町、中町、渡辺橋以東は法華庄次郎屋敷と大坂町鑑に見ゆ。

近松語彙、鶯の啼声の「ほけきやう」に「法華長屋」をいひかけたのである。法華長屋は大坂堂島新地内にあつて渡辺橋筋の東に当る。大坂町鑑に、船大工町、中町、渡辺橋筋以東は法華庄次郎屋敷と見えてゐる。

藤井博士、堂島中町

近松語彙 堂島新地の中町をいふ。堂島新地は元禄元年に開拓されて程なく遊女町となり、南南の浜筋から中町、北町、裏町の四つの通り筋がある。

法花屋敷と中町この二者は、予備知識なしに地図を捜がしても所詮見つかるものではない。尤も法花屋敷は宝曆大坂町鑑の、

堂島永来町

堂島北中通ノ丁、渡辺橋筋分東、桜橋南詰浜とも、「法華庄次郎やしき」と云ふ。

それで凡その見当はつくが、永来町を何故さう呼ぶのか来歴がわ

かるまい。この堂島永来町は新地開発前よりあつた古町の一つ

拙書「聚成」反四参看——だから町名も新地抜きの堂島永来町で、北浜は過

書町の分限者法花庄次郎屋号が全町内を所持し、借家を建ててゐたので、時人呼ぶに法花屋敷をもつてしたのである。

難波雀延宝七

塩問屋

諸方塩

過書町 法花庄次郎

大坂北組南組天満組水帳町数家数約数寄せ帳元禄八写

堂島永来町 家数二 約数二六

名代 塩屋庄次郎

但、一丁一屋敷故年寄無之

しかし新地開発後の永来町を判然と載せている地図は、宝曆板撰州大坂地図拙書「解説」と類が最初ではないかとおもふ。

次に中町であるが、これは堂島新地北町のことであつて、町鑑にいふところの北ノ中力町筋に当るので、俗に中町と呼ばれ、色街の通名になつたものであることを知つておいて頂きたい。

撰津国大坂鑑難波丸元宝永

新地茶屋

堂島新地北町

同 裏町

色茶屋諸分車元禄十六

新地中町筋 法花やしきより西

心中二枚絵草紙の「近江屋出で、浜筋や」といふ近江屋も、この中筋の茶屋名寄に出て来る。してみれば所詮浜筋が堂島新地裏町の蜷川筋であるべきことが明瞭になるであらう。古地図では法花屋敷とおなじく宝曆図に新地北丁と初めて見ゆるが、近松学者の好んで引くところの図鑑綱目にも、蜷川は梅田橋のほとり「ちや屋丁」の書入れはあつた筈。もし遡って元禄板の地図に求めるならば、

改正大坂絵図元禄十四万屋板

新地入増補大坂図元禄木村上板大坂古地図影所収

新板増補大坂之図元禄木林板拙書「解説」挿絵

新板撰津大坂東西南北町嶋之図元禄十七大和屋板断

孰も堂島新地新茶屋町の所在を認めてゐるが故に「難波小橋から田蓑橋あたりまで煮売屋、色茶屋軒を連ね、南の浜筋から中町、北町、裏町の四筋」すべて遊女町のやうに解くが如き先考も避けられる。

(四) 立売堀をこぎ廻し、弁当済まば椀家具も釜もちやくちやく荒屋橋、跡へはんなり入茶の茶備後町 今宮心中宝永七

参考、

藤井博士、国花万葉記に西横堀北浜より十五筋目に、あらや橋とあり。

近松語彙、ちやくちやく洗あぶやを、あらや橋にかけて斯く云ふたのである。あらや橋は西横堀川に架り、唐物町筋（北久太郎町

北隣の筋）で備後橋から南四つ目の橋に当り、今の新江達橋あたりにあつた橋。

荒屋橋に洗あぶやをかけたといふも、西横堀に架つてゐる橋は奈良屋橋であつた。

摂陽群談

奈良屋橋（西横堀筋）奈良屋町より東は長浜町の行当に渉る処也。

公私要覽元禄十六

公私要覽宝永六

西横堀川 東八長浜町、西八奈良屋町

奈良屋橋 東八長浜町、西八奈良屋町

江達橋 東八榎木町ノ間、西八権右衛門町

地図でも、林、大絵図拙書「聚成」、万屋、図鑑綱目ともに奈良や

橋「ならやはし」とあり、船場では米屋町南本筋に下船場では奈良屋町に架けてゐる。また奈良屋橋といふ橋の名も奈良屋町に涉

るところに基く。なるほど国花万葉記元禄十は唐物町筋の西横堀に

「あらや橋」とあるが、同書の阿波座では、

あはさ堀北今二すじめ、西横堀あらやはし

とあつて、実地を知らないものとはかく辻褄の合はぬことをどう解くか。船場の唐物町は阿波座では北の浜より三筋目の神田町いまの西区阿波座上通一丁目になるから、荒屋橋は辻一つ北へ筋違ひに架つてゐたとでもいふのか。唐物町筋には新江達橋が昔も

今も不変、川向ひの神田町に架つてゐるのに国花万葉記は、

北浜今十六筋目 西横堀榎木町

農人橋筋北久太郎町^中略「新遠江橋」

あはさ堀北今四筋目 西横堀新遠江橋

と、笹橋ささいまの笹の架るところに拠るなく新遠江橋、これは今の新江達橋の誤記に違ひないが、外づさねばならなかつた事情も判るとおもふ。尤も古地図のうちには奈良屋橋を「あらやはし」と載せてゐるもの——改正大坂絵図元禄十四万屋板——がないのではな
いが、殊更ら地形を歪め取繕ふてゐる図面に惑はされてはならぬ
筈。また新地入増補大坂図元禄末村上板に於いては「ならや橋」と
「あらや橋」を併記し念を入れ過ぎてゐる。とにかく近松の「あ
らやはし」は奈良屋を抜つたものであつて、流行唄にはその後と
ても始終やつてゐる手。(以下、新板はやりおんど
ひやうこくとき橋づくしなにはの
眺 堀江市之側 綿喜板を引用してあるが省略する。)

以上で、近松浄瑠璃に見える地名・橋名の正体が明白になると共に、一部の大坂古地図・地誌のみにて考証することの危険性を読者に示唆する好論文であることに頭を下げるばかりである。

『史学趣味』二巻六号掲載の「大坂図の見方」(二)は、「以上は
『当時の地図に依る実証的考察』を克明に試み、古地図の撰出如何で
判かることさへ知れ難くしてしまふ惧れあることを指摘したかつたか
らである。わが郷土史界に於いても亦おなじく、古地図の見方を誤つ
た似而非なる考証がとかく行はれる。」と断じて、以下四実例を挙げ、

「さう説きたてゝ来ると特に古地図に恵まれた人でない限り、地図を
適切に使ふこと至難のやうにおもはれるが、工夫によつては或る程度
までの均霑に浴すること必ずしも難事ではない。それには先づ」と前
置して、

「第一 到大形図を撰ぶことが肝要である。小形な懐中図に較べると
大形図は地形に無理が少しいし、紙幅に余裕もあつて詳細を尽すことが
可能である」と論じて、大形図として有益な三実例を記し、

「第二 は刊記に捉はれぬことであつて、古地図の慣はしとして補訂
すべきものを怠つてゐることが頗る多い。それ故に故事が知れ研究上、
裨益するところあるにしろ時代を誤つてはなんにもならぬ。」とし
て、四実例を示し、

「第三 たゞ古町名に關しては延宝度到大更改があつて、貞享図をも
つてしても判かりかねることが多い。それには、河野道清 新版大坂
之図 明暦三年板(古板大坂地図聚成所収)と延宝板『道しるべ』
(浪速叢書第一所収)をお薦めする。尤もこの『道しるべ』は巷間用
ゆるところの呼び名を認めた手引に過ぎぬから実の町名が違つてゐる
場合は知る方便を欠く憾がある」一実例として、「常盤町といひ雪踏
町といふは通り名であつて、伏見立売町が常盤町であり南農人町が雪
踏町であること」を、各町の水帳奥書を引証され、「即ち延宝度の更
改で伏見立売町が常盤町(一丁目乃至四丁目)になり、南農人町が分
れて一丁目と三丁目になつたのである」と解説されている。

「最後に用字上の注意を蛇足とは信するが附け加へておく」として、

「願敬寺 明曆図集成（願慶寺）

新斎はし 元禄図（心齋橋）

大三丁 貞享図聚成（近江町）

ほか三例を引用し（括弧内が正字）、「古人の癖として当て字を使ふことが多い。これは地図だけでなく地誌にも通することであつて、それを正しい当時の書き方と取違へてはなんにもならぬ。」と親切な注意を与えられ文を結ばれておられる。

以上の佐古先生の大阪古地図の研究論の外に、筆者の手許に僅かに残存している同先生の他の著述も紹介して置こう。先ず『大阪商史学資料百種展観書解説』（大正十五年十一月刊）は、大阪高商創立四十七年記念祭挙行の日を期し、同校図書館閲覧室で展覧した百種を、兩替・蔵屋敷・藩債償却・商家・米市・株仲間・川船・家賃・通商司・訴訟・算法に分類して、各文の簡明な解説を佐古先生が施こした全三十三頁。大阪商史学研究室編、大阪史学会発行で、所収文献は、同研究室主任佐古先生の蒐採したものである。

次に最近大阪の古本屋から入手した豆本であるが、題箋に「がふほんけふ希有（二字不明）」と題し、最初の「けふ其一 祭の大阪 佐古慶三」（横書三行を縦書に改めた。——引用者注）の書名の下に、延宝板難波鶴跡追所載の「天満天神祭くわんぎよの所」の挿絵を掲げており、その裏面に「希有（第十六輯迄既出）けふの姉妹篇は共に希有三のすさびなれど、唯雅俗兩道の差別を附せるのみ。希有・けうは又今日に普通する、今日を中軸にして温故知新、所謂歴史の教訓を習得

するのが小生の念願である。」と序文を記してあり、「けふ其十」には、「南」区誌の編纂も別冊南区志編纂報告のように、大体旧臘未を以て一段落を告げた。だから豆本『けふ』も本冊で以て、一先づ休止としたい。

惣目

- 其一 祭の大阪
- 其二 大阪橋名考 附 陽台地名考
- 其三 千日前聞書
- 其四 続大阪町名考
- 其五 艷容恋月花
- 其六 北細見考
- 其七 朱唇吐虹 附 江南竹枝
- 其八 商人のお正月（町方の歳中行事抄）
- 其九 狂歌大阪志
- 其十 長柄橋由来書

附冊 南区志編纂報告

と記述されている。但し筆者手許本には「南区志編纂報告」は附載されていない。なお本『合本けふ』は稿者佐古慶三、印刷兼発行者希有文庫、昭和三年一月二十五日発行と刊記に見える。また前引『大阪商史学資料百種展観書解説』は『希有』第十六輯である。

所で『けふ』の内容紹介は省略するが、その五に、佐古先生の編著書目が記載されているので、本稿の前出のものを除いて、左に記して

置く、

大阪古町図説（附稿本大阪古町索引）

懷中難波雀（複製）

難波雀類書考

大阪町名考

近世大坂人口統計の研究

日本商史学の提唱と其本質

佐賀藩蔵屋敷拂米制度

稿本大阪歴代役人録

以下近刊

巷談大阪商業史

大阪商業史要

大阪郷土史

大阪町鑑考

大阪年表

これ以外に『希有』第一―第十六輯があるから、昭和三年までで、これ程多くの研究・著書があり、その後数十年の研究が続行されているのであるから、その量の膨大さに驚嘆するが、その内容の質の高さは言うまでもないであろう。

近世江戸の研究に古地図・地誌類を活用して、精緻な研究を重ねた真山青果翁の偉大な成果は、その研究助手を長年勤められた綿谷雪氏の努力により、「西鶴と江戸地理」（『真山青果全集』巻十六所収）、

「忠臣蔵地誌」・「江戸名家居住考」（同全集・補巻五所収）のほか、「西鶴語彙考証」・「西鶴雑話」（同全集巻十六所収）等に纏め公表され、我々後進西鶴研究者に多大な裨益を与えられたが、それに匹敵する佐古先生の近世大阪研究論文・著書が集成されず、そのままになっているのは誠に残念で、在阪研究者の中で、志の有る方がその諸研究を集大成され（『希有』・『けふ』両豆本類までも）、先生の論文集として上梓されんことを、八十路を越えた筆者は熱望して止まない。それが実現すれば、西鶴・近松など元禄文学の大阪地理研究、大阪商業史研究などが一大進展を遂げることは、火を見るよりも明らかであるからである。

なお、拙著『世間胸算用 付現代語訳』（角川文庫）の語注の誤りについて、示教下さった二枚の葉書も筆者の手許に保存してあるが、先生は事あることに筆まめに教えて下さったことは数多く、その御恩は終生忘れられない思い出である。

以上で佐古先生ご研究の一斑は紹介し得たと信じるが、願わくは、直接に先生の著書・論文を一読されて、その研究成果の程を味わわれん事をと一言して筆を描く。

（平成二十年三月二十六日記）

